

第 10 回九頭竜川流域懇談会 議事骨子

日時：平成 30 年 5 月 29 日（火）13:30～16:00

場所：福井県国際交流会館 B1F（多目的ホール）

第 10 回九頭竜川流域懇談会内容は次のとおり

◆座長の互選他

- ・新委員の紹介

新委員 1 名の紹介を行った。

- ・座長の互選

新座長として〇〇委員が互選された。

- ・規約の改正

規約の一部改正について報告した。

◆平成 29 年度出水報告

平成 29 年度の出水について、河川管理者（国土交通省・福井県）から報告を行った。

■委員からの主な意見・質問及び河川管理者の回答

（委員）

福井豪雨と H29 年台風 21 号との豪雨特性の違いは何か。

（河川管理者）

福井豪雨はピーク雨量がかなり大きかったのに対し、H29 年台風 21 号は継続時間が長かったものの、ピーク雨量はさほど大きくなかった。

（委員）

範囲も広がったのか。

（河川管理者）

そうである。

（座長）

昨年の九州北部豪雨など、全国各地で集中的な豪雨が増えている。福井豪雨の経験を生

かして改修を進められてきたことが非常に大きなベースになっている。実際の降り方は、福井豪雨のときは時間的に集中していたが、降っている場所はさほど広範囲ではなかった。集中的な豪雨が降り得る場所が盲点になっていないかということも改めて点検しながら、検討を進めていくことが必要ではないか。

◆審議

1. 河川整備計画の変更

日野川ブロック河川整備計画の変更（福井県）について、河川管理者から以下の項目の説明を行った。

- ①鞍谷川の河川整備の実施に関する事項の変更
- ②服部川の河川整備の実施に関する事項の変更

■委員からの意見・質問及び河川管理者の回答

（委員）

今の計画を変更しながら進めている様子が大変よくわかった。これを参考事例として各地に発表すればいいのではないか。

地元との交渉にかかった期間はどれくらいか。

（河川管理者）

平成13年頃から交渉を進めている。

（委員）

新川を掘削する案は、コスト的に安くなるのは非常にいいことだと思う。ただ、この区間は水田地域を通るので、水田部の排水系統を十分調査し、変更に対応できるように考えてほしい。

（河川管理者）

しっかり調査し、必要な対応を行う。

（委員）

水田部に新川を掘削するということで、環境教育の面から考えても、生物が行き交うように、さらに生物を触れ合う体験ができるような河川にしてほしい。今後、他の河川の手本になるようなケースにしていくと、地域で愛される、とてもいい河川になるのではないか。

(河川管理者)

地元ともよく話をしながら進めていく。今のお話を参考にさせていただく。

(委員)

合理式モデルを貯留関数モデルに切り替えたのは、どんな理由からか。

(河川管理者)

県管理の河川は中小河川が多く、水位を測る機械を設置していない川が多数ある。測定する手段がなくても単純に流量が算出できるということで、県内で合理式を採用している河川は多数ある。近年、川の危険性を察知するという水防管理の目的のために水位計が多数設置され、川の流量データが入手可能となった。このため、自然現象にできるだけ整合が図れる貯留関数法に切り替えた。

(委員)

服部川の辺りで特に環境を配慮すべき生物はいるか。河和田地区はホタルが有名だが、ホタルも含めてこの辺はターゲットになる生物はいるか。

(河川管理者)

魚類では、オイカワやカワムツなどがいる。底生生物では、カゲロウ類やトビケラ類等が確認されている。ホタルもいる。

(委員)

地元と協議しながら、総合的に生物多様型の環境配慮をしてほしい。

今は、田んぼの排水系と川の連関に配慮が求められる時代になってきている。今後の河川整備ではその辺も配慮してほしい。

(河川管理者)

承知した。河川と農業用の排水路の連続性を保ち、いろいろな生物のバリアをなくすような取り組みをすべきだということで理解した。

(座長)

河川の縦断の連続性に対し、これは横断の連続性の話であり、これから新しく造られる河川が水田地域とどういう形で接続されるかということも、当初からしっかり考えて造り込んでほしいということである。

2. 河川整備計画の点検

日野川ブロック河川整備計画の点検（福井県）について、河川管理者から以下の項目の

説明を行った。

- ①天王川の河川整備
- ②吉野瀬川のダム整備
- ③吉野瀬川・吉野瀬川放水路の河川整備
- ④天王川（上流部）での魚道整備事例

■委員からの意見・質問及び河川管理者の回答

（委員）

天王川は計画高水が 20 分の 1 確率なのに対し、吉野瀬川は 30 分の 1 確率ということだが、その使い分けの考え方を説明してほしい。

服部川の旧川の扱いを今後検討してほしい。

（河川管理者）

改修規模は資産や人口などを整理して望ましい治水安全度を設定するが、改修区間の下流の整備状況に配慮する必要がある。天王川については、改修区間の下流側が 20 分の 1 で整備されているので、それに合わせて 20 分の 1 と設定している。

服部川の旧川は農業用水等で取水する区間として残るため、廃川にした場合の取り扱い等については地元と協議している。

（委員）

白山地区の取り組みは、県の管理者・技術者の方々が試行錯誤しながら魚道を整備し、併せてモニタリングをしっかりとっていて、非常に素晴らしい取り組みである。この河道は、放っておくと土砂がたまって河道内に草が繁茂するが、これをどういった形で管理していくのか。

吉野瀬川放水路は、水が常時流れているわけではなく、洪水時に水を流すものであるため、非常に細かな泥が堆積し、植物が生えてくると考えられる。細粒分がたまると生物にとってあまり好ましくない環境が創出されることがある。吉野瀬川では、これから上流で工事がされたときに出てくる濁質をどのように管理していくのか。

（河川管理者）

まず、天王川の土砂堆積だが、河川管理者が定期的に維持管理をするのに併せて、「地域をつなぐ河川環境づくり」という地域一体型の草刈り活動があり、そういったものと併せて河道をチェックしていく。草を全部刈り取ると、魚や他の生き物の隠れ場がなくなってしまうため、コウノトリの研究センターや地元の方々と相談しながら管理していく。

吉野瀬川放水路については、洪水後にどうしても細かい砂が日野川の合流点でよどんでたまってしまう。ここは漁協からも懸念されているので、引き続き環境保全委員会の中で対応を考えていく。

吉野瀬川では、上流側で工事を実施しているが、今はアユなどの遡上に影響がある期間であるため、下流側で濁水しないように、例えば貯水槽を設けて上水を出すなどの対策をしている。放水路はまだ稼働し始めて1年なので、引き続き点検していく。

(委員)

白山の方はこの季節、天王川の河道内にもホタルがたくさん飛ぶため、草刈りのタイミングや泥上げのタイミングも考えてほしい。吉野瀬川に関しては、今の説明のように、モニタリングを含めてしっかりと点検をしてほしい。

(委員)

吉野瀬川ダムのアベサンショウウオの生息エリアのうち、今回代償措置を行ったのは何分の1くらいに当たるか。

(河川管理者)

アベサンショウウオは一番影響が大きく、確認地点の消失が30%以上あると判断している。試行錯誤的にビオトープなどを造って、複数年に分けて移殖している。数量的な把握は出していないが、移殖先と元の場所で個体数を常にチェックしている。

(委員)

アベサンショウウオについては、県の自然環境課とはどういう連携を取っているか。

(河川管理者)

環境委員会の中に、委員として入っていただいている。

(委員)

アベサンショウウオは、福井県で最も大切な生物の一つなので、何としても劣化させるわけにはいかない。代償地の維持も含めて、自然環境課と密に連携を取って保護することを強くお願いする。

(河川管理者)

承知した。

(委員)

天王川の親水性を考慮した環境配慮対策について、護岸を土張りにすると、植生は放っておくとセイタカアワダチソウが繁茂する。昨年も吉野瀬川で堤体にチガヤの植生を誘導すると後の管理も楽なので、そうしてはどうかと申し上げた。特に天王川の朝日小、朝日中の辺りでは、セイタカアワダチソウの群落になるのは好ましくないなので、堤防の植生も

計画のところからぜひ考えてほしい。既に工事は進行しているのか。

(河川管理者)

この場所の工事はこれからである。今のご指摘を踏まえて計画する。

(委員)

吉野瀬川ダムに水力発電を導入することを検討したか。していないなら検討してはどうか。

(河川管理者)

吉野瀬川ダムはゲート操作がないため、維持流量の水を使つての発電が現実的にできるかどうかの検討を始めたところである。

(委員)

滋賀県彦根市にある姉川ダムが吉野瀬川ダムと規模が同じくらいで、タイプが同じである。姉川ダムは県営ダムだが、小水力発電を全国公募して民間が年間 500 万 kWh くらい発電している。これを参考に検討してはどうか。なお、吉野瀬川ダムは里にも近く自家消費や有事の際の EV ステーションにも提供できる。

(河川管理者)

今の事例を参考に検討する。またご教示願う。

(座長)

福井県や九頭竜川流域では、大手の電力資本が入って電気を作っていた歴史があるが、今は、エネルギーも地産地消という観点で、小さくても地元に着したものをどう作って、育てて、利用していくかという時代に大きく変わりつつある。維持流量を少しでもエネルギー化していくという点では、アメリカではノンパワードダムをパワードダムにするというキャッチフレーズをエネルギー省が出している。いい事例も出てきているので、ダムをこれから造られるのであれば、後から造るよりも同時にそういうものを造り込んでいけば、コスト的に見合うものができていく可能性も十分あるのではないか。発想を少し柔軟に、時代を先取りした形で進めていけばいいと思う。

(委員)

コウノトリの繁殖事業について、「コウノトリは自然再生のシンボル」と書いてあり、写真に「コウノトリ田んぼはコウノトリを呼び戻す農法」と書かれている。この委員会が始まるたびに、国交省の委員会であるが、農水省や環境省との連携も必要なので、福井県でそのような委員会を立ち上げてみてはどうかという話をした。コウノトリの運動をするの

は私も大賛成だが、実際にはコウノトリの田んぼで、米をたくさん取るために「私も半分以上は農薬をやっている」という話をよく聞く。このため、もう少し環境全体から見て、田んぼなどの幅広いところと連携した運動をもう少し行っていくと良いと思う。

(委員)

親水や交流という観点では、川だけではなく、水辺を中心とした川のあるまちづくりが重要になってきている。

国交省が川を使って営業していこうという機運が高まっている。日野川は全国でも先進事例の一つである。流域住民と民間と行政がうまく関係性を持っているところが注目されている。しかし、管理や申請の際にどうしても一枚岩ではないところがある。それを乗り越え、日本で最も先進的な河川の使い方を行っている先進事例として、全国の事例を引っ張っていく立場にならなければいけないと思う。

また、いわゆるシェアリングエコノミーのような、川を舞台にした営業活動を展開することによって、人口増加や川のあるまちづくりが発展的に進んでいく。これは先行事例がまだない。先行事例がない取り組みだからこそ、よりリードしていくことを、福井から、この日野川からスタートしたい。先進的な事例を民間と行政がさらに協力しながら進めていきたいと思うので、今後の関係性と推進をよろしく願います。

◆報告

・九頭竜川水系河川事業の実施状況（近畿地方整備局）

九頭竜川水系河川事業の実施状況報告について、河川管理者から以下の項目の説明を行った。

- ①河川整備の事業内容
- ②足羽川ダム建設事業
- ③ダムの役割や防災への意識向上の取り組み

■委員からの主な意見・質問及び河川管理者の回答

(委員)

全体をバラバラに考えないで、川を軸にして少しまとめてみたらいかがでしょう。

生態系は遷移していきます。人間が魚道を造ったら、魚の移動が可能になって行き来ができていい反面、いいことばかりではなく、外来種が入りやすくなり、在来種が圧迫されることも起こる。魚道がないことに慣れてしまっているのでも、魚道を造っても復元したことにはならないというようなことが、生物から今言えることです。

(座長)

土木と生態との連携はかなり進んできており、九頭竜川の取り組みもかなり先進的に捉えているところもある。ただ、いろいろな面があることを忘れないようにというご指摘だと思う。

(河川管理者)

土木に携わる者として、いろいろなものに改変を加えていくが、その中でも変えなければならぬところ、変えてはならぬところを、他への影響もよく考えながら取り組んでいくべきものだというのを、身を新たにしたところである。

日野川の片粕だけではなく、川の周辺の方々と一体的に水田を含めて取り組んでいく必要があると思う。そういう機運をつくれたらということで、これを始めているところもある。そういう意識を持って一生懸命やっていきたい。

(座長)

最後に〇〇先生からご指摘いただいたことは、いろいろなところに通じるお話だと思う。国と県でぜひ連携を取っていただきたい。